



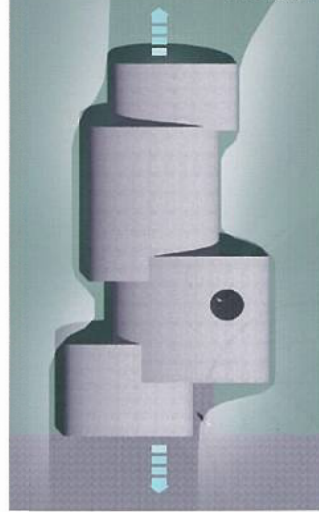
浦添ようどれ(石垣)



安波茶橋



平面構成



断面構成



ゲートとなる施設
浦添大公園のエントランスとして、来園者を導き入れる「門=ゲート」性を有する建築を提案します。

過去~未来を繋ぐ暗喩としての軸を有する施設

日常(街)空間から歴史的意義を有する非日常(公園)空間へ向かう人々の意識を交換する媒介としての建築を提案します。歴史的なストーリーを新たな都市軸として組み込むことで、地域の文化と密接な関係性を創出し、過去~未来の時間軸を包含する地域における核となる施設として位置付けます。

憩いの場としてのコミュニティ施設

一般来園者は基より、周辺の学校や公共施設と連携を図り、課外活動に利用可能な地域に開かれた施設として、公園との密接な関係性を有する憩いの場としての施設となります。

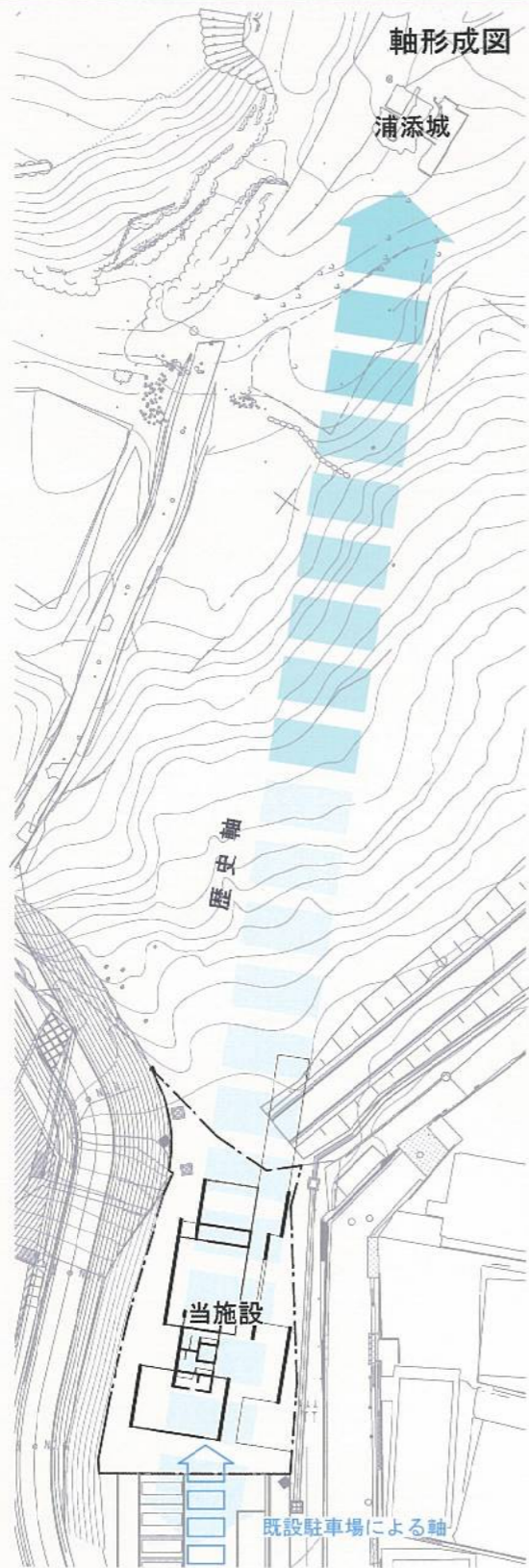
デザインアイテム

グスクアーチ型門
組石造により構築された柔らかなアーチ形状を有する門、橋等。構造ヒエラルキーに端を発するアルゴリズムを基に構築された石造文化によって育まれてきた琉球美を踏襲し、現代の技術により表現される新たな建築を提案します。



マウンド/ラウンド
背景に展開する豊かな緑を纏った柔らかなマウンド形状の稜線を描く丘陵との親和性を有しつつシンボルとなる建築を創造します。

小さなスケール
各機能を覆う独立型のアーチフレームは、周囲の住宅群と等価なスケールとなることで、地域に馴染む施設となります。



軸形成図
浦添大公園と当施設の利用促進目的により、1号園路と当敷地をつなぐ外部階段の敷設を提案します。

建設に際する住民参加型のイベントの開催。参加型のイベントを催し、将来に亘り、利用者に親しまれ地域に根付く「公共」施設となるべく建設時のプログラムを提案します。
①草花を施設敷地、周辺に植栽
②ワークショップやオリエンテーションの実施

休憩室
公園側に配置し、丘陵に広がる豊かな環境を眺望する憩い+生涯学習や娯楽を楽しむコミュニティスペースとして来園利用者に開放します。

多目的室
当施設の主要な機能となる多目的室は、施設のほぼ中央に配置し、外部環境との関わりの中で最も安定した位置を選択することにより、整った内部環境を提供し、運動性の高いオリエンテーション活動から、静けさを必要とする展示活動に至るまで、多様な利用を担保します。

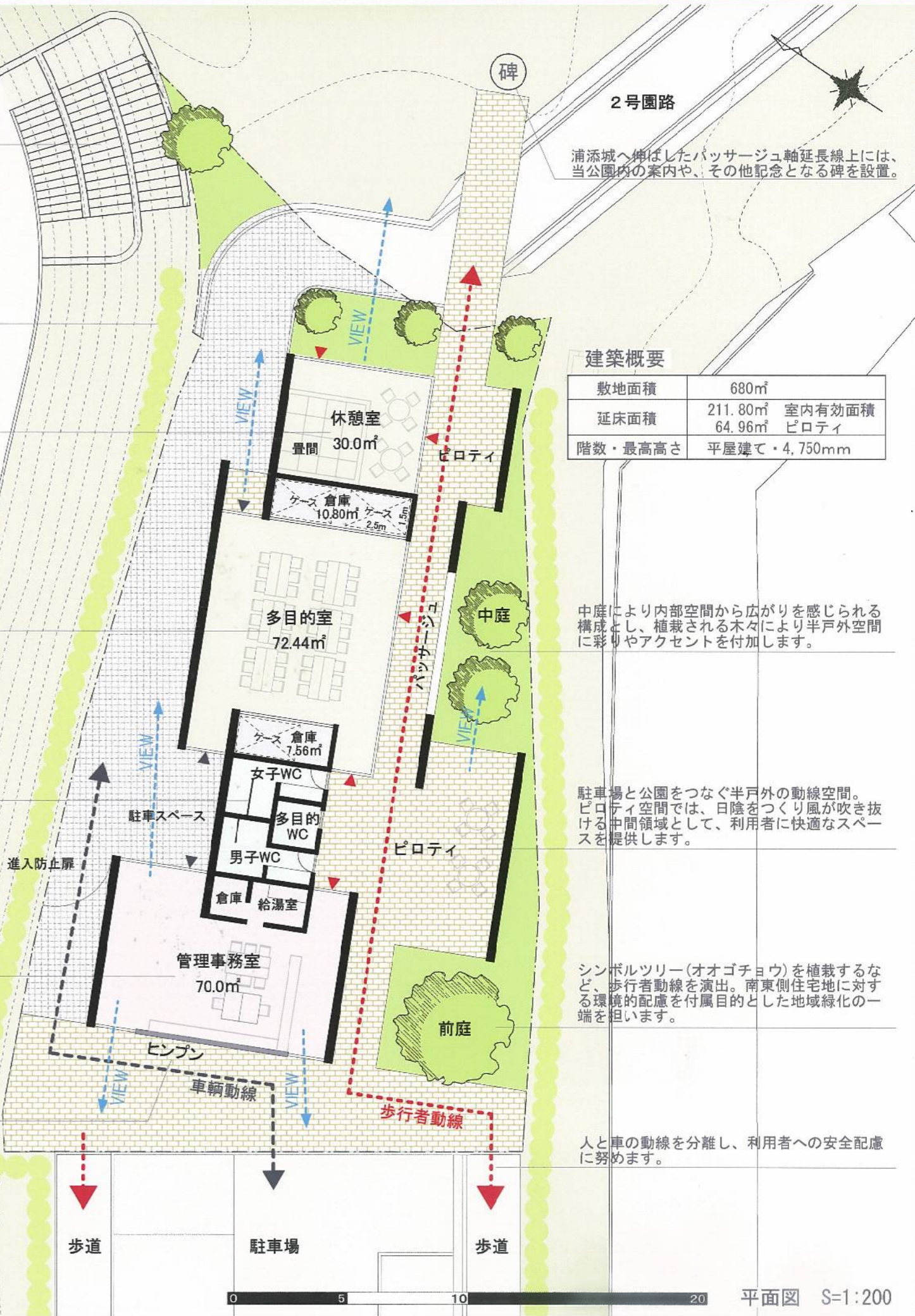
水廻り空間
主要屋内機能の中間に配置し、利用の効率化を図る他、公園利用の為に通過する来園者に対しても利便性の高い使用を可能とします。時間外の使用や防犯上の問題を解消する為、扉には施錠を施します。

管理事務室
人の出入りの確認を目的として、駐車場側に配置。多様なプログラムの実現を可能とする為にワンルームによる構成とし、フレキシブルな空間を創出します。

ヒンブン
管理事務室の執務としてのプライバシーを確保しつつ、施設の顔としての明確な表情を有するファサードを形成します。

各フレームの配置を平面的に「ズラす」ことにより、視線(VIEW)の抜けが生まれ、それぞれの機能に応じた目線の届く視認性の高い空間を創出します。また、「ズレ」は風や光を各内部空間にもたらし、ことにもつながり、屋内環境を快適な状態へとコントロールします。

公園整備計画の考慮
建物をセットバックしていることで、1号園路から下りてくる法面工事の施工に対して有効幅を確保出来、周辺環境を考慮に入れて施設整備が可能となります。



浦添城へ伸ばしたパッサージュ軸延長線上には、当公園内の案内や、その他記念となる碑を設置。

建築概要

敷地面積	680㎡
延床面積	211.80㎡ 室内有効面積 64.96㎡
階数・最高高さ	平屋建て・4,750mm

中庭により内部空間から広がりを感じられる構成とし、植栽される木々により半戶外空間に彩りやアクセントを付加します。

駐車場と公園をつなぐ半戶外の動線空間。ピロティ空間では、日陰をつくり風が吹き抜ける中間領域として、利用者に快適なスペースを提供します。

シンボルツリー(オオゴトヨウ)を植栽するなど、歩行者動線を演出。南東側住宅地に対する環境的配慮を付属目的とした地域緑化の一端を担います。

人と車の動線を分離し、利用者への安全配慮に努めます。



ピロティ



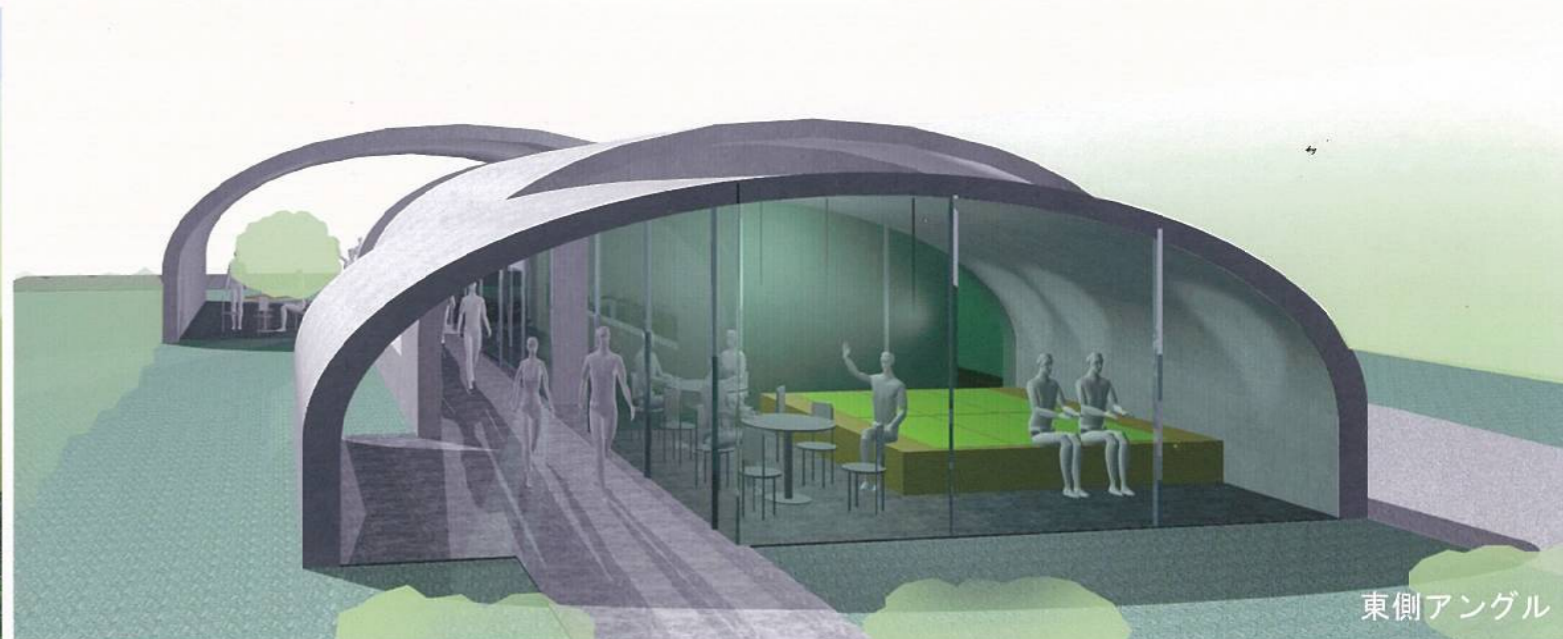
多目的室



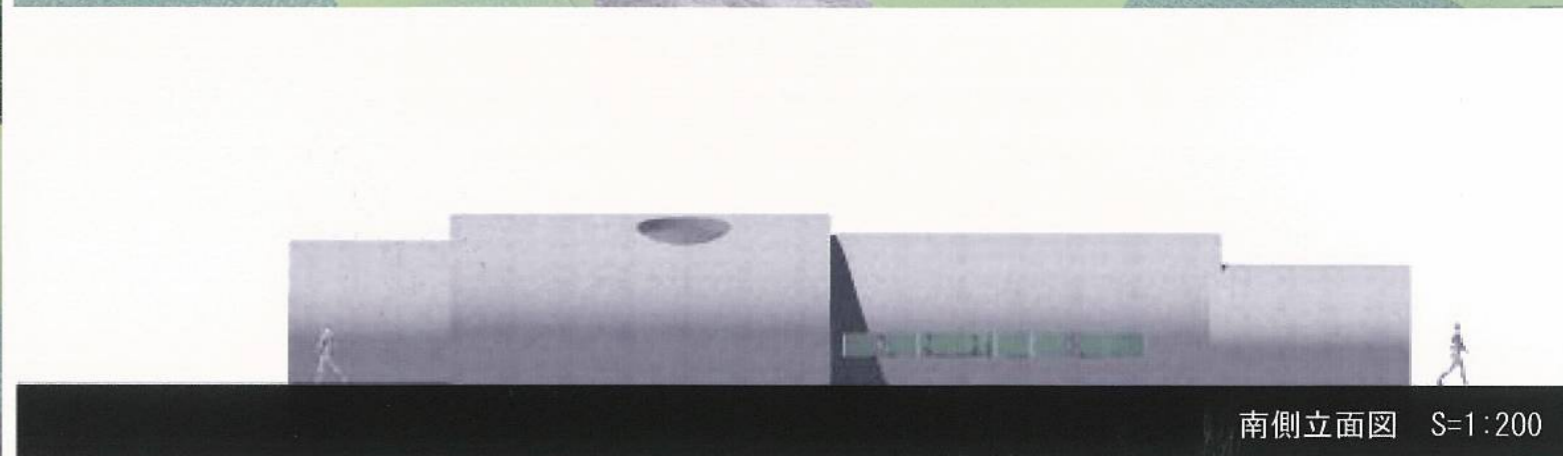
休憩室



南側アングル



東側アングル

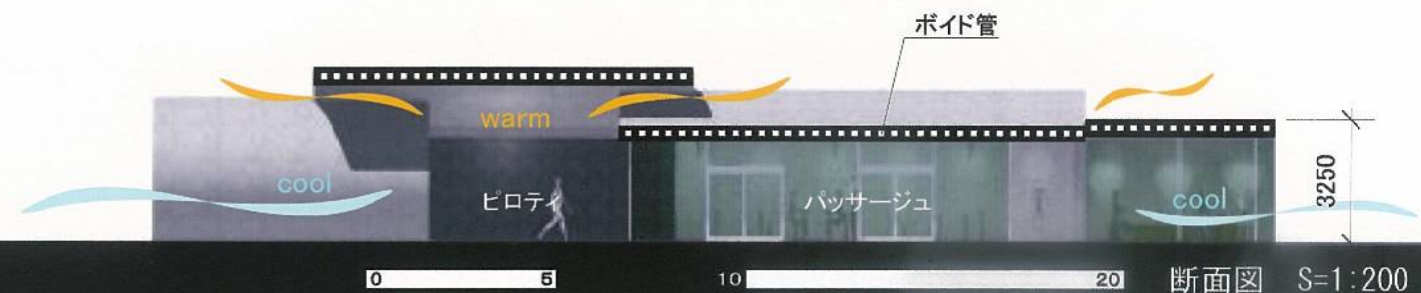


南側立面図 S=1:200

曲げ加工可能なフレキシブルボイド管を構造躯体内に配し、躯体自身の重量の軽量化を図ると共に、電気・機械設備用のサイヤ管として利用することで、簡易なメンテナンスを可能とします。また、ボイド管内の空気層は断熱効果としても重要な役割を果たし、熱負荷を下げることで室内環境を安定させ、過剰な空調負荷を抑制することへとつながり、省エネ化を果たします。アーチ型フレーム外面には、コンクリートコート保護材の上に、光触媒による塗布を施し、ランニング面において省コスト化を図ります。建設に際し、県産材を主に使用することで、地場産業を意識した設計計画プログラムとします。上述内容を実施することで、環境負荷の低減、自然要素を最大限建築内に取り込むことなど、持続可能な施設づくりを提案します。



断面図 S=1:200



断面図 S=1:200